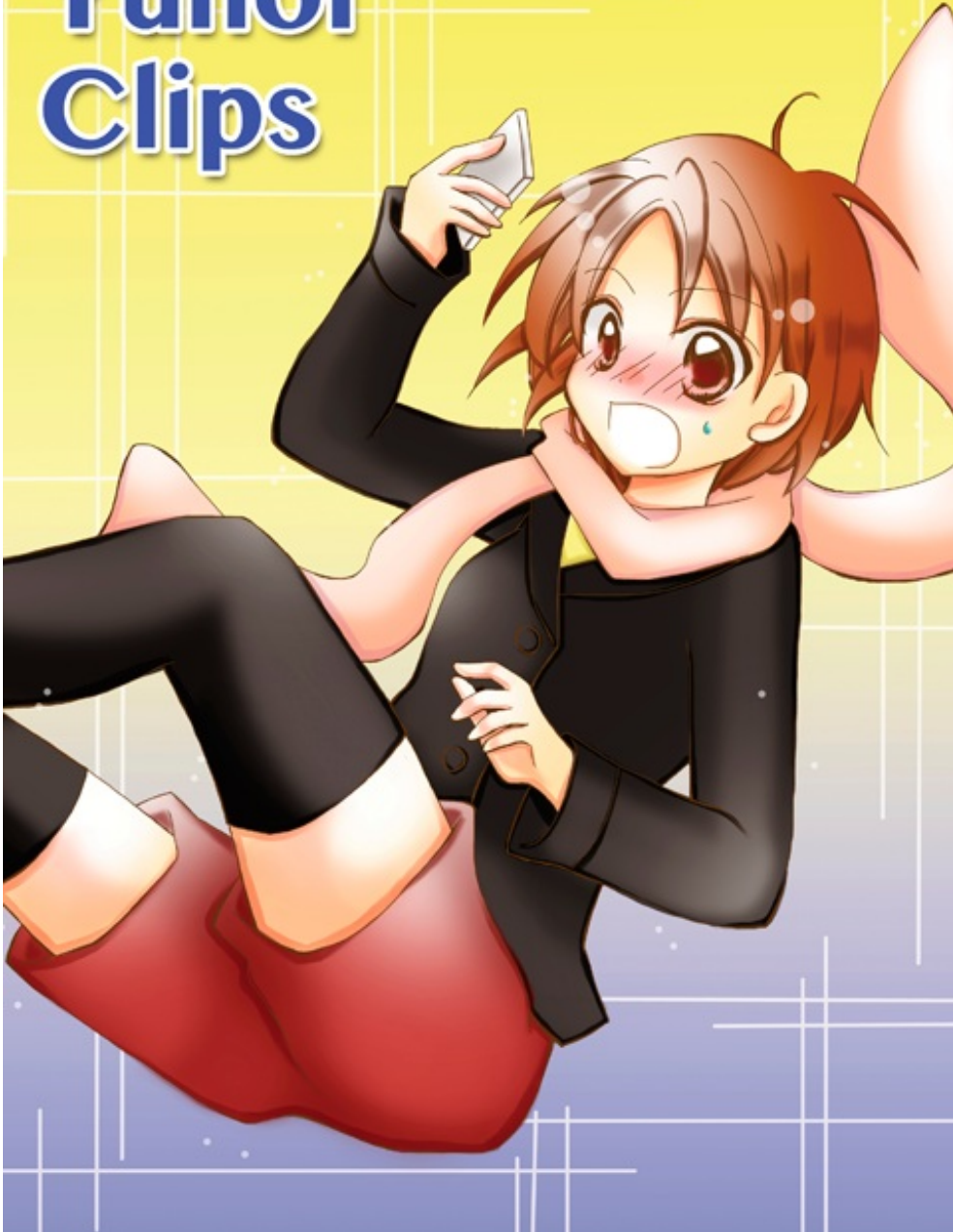
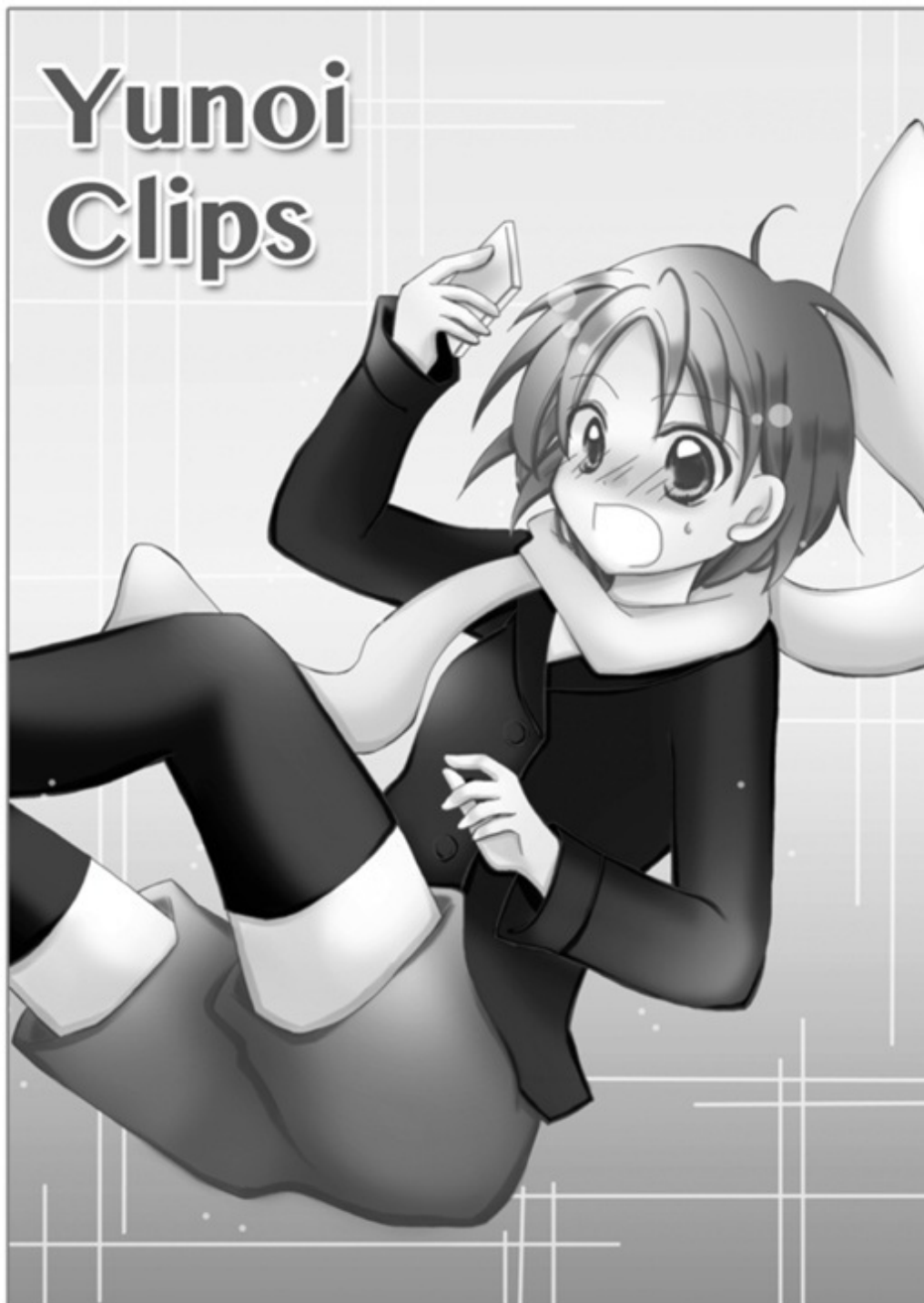


Yunoi Clips





~another story~

電柱少女ゆのか

かのーぷす

「なんでわたしのパートナーだけロボットなんですかあああっ！」

ゆのかは顔を真っ赤にして、ゾリラ司令にくっつかか
った。航空自衛隊特殊技能科、通称「空自のエスパー部隊」
の構成員は、通常二人一組になって怪獣退治等の危険な任
務に当たる。超能力者養成学校からこのエリート部隊に配
属されて来たばかりのゆのか中尉のパートナーに選ばれた
のは、ロケットエンジンによる超高速飛行を得意とする最
新鋭巡航ミサイル型ロボットの試作機、「ポール」だった。
「しかも、これって、電柱じゃないですかあああっ！」

ポールは、その高速飛行能力を最大限に生かすため、飛
行に不必要な物を一切装備していない。直径約45センチ
の長円筒形のボディの中はほとんどロケット燃料で占めら
れ、小型の姿勢制御翼が上端に装着されている。その翼の
そばに、ボディよりやや太めの短円筒形の小型超高出力ロ
ケットエンジンを一基積載している。早い話、変圧器の付

いた高さ約2・5メートルの、普通の電柱である。電柱に
しては2・5メートルは短い、これ以上長くすると一般
施設内での自力での移動が困難になってしまう。飛行しな
い時は下端についた小さな車輪で、ボディを立てて移動す
る。つまりか電柱が立ったまま移動するような光景である。
丸い小さなレンズとスピーカーがひとつずつボディの中程
に埋め込まれており、これがポールの目と口である。ただ
しポールは「アイ」としか言わないし、実際に物を見てい
るかどうかはわからない。

「何言ってるの。パートナーをもらえるだけ有難いと思
いなさい。エスパー養成学校から報告が入ってるわよ。あな
た同級生に自分のドジをからかわれたからって、クラス全
員をあなたの超能力で病院送りにしたんだって？ そんな
アブナイひとに、普通のパートナーが付けられるわけない
でしょ。ポールなら、ゆのかの超能力も通じないから」

「ぞ、ぞりいいーっ！」

「いくら親友でも、職務ではあなたの上司よ。ここではゾ
リラ准将閣下と呼んでよね。ゆのか中尉、ただちにポール
と飛行訓練に入りなさい！」

「うぐぐぐううっ。がるるるるるー。ううううっ。はあ
（諦め）」

かくして、ゆのかの後を小型の電柱が常についてまわることになった。

「来ます！ガチャピン3匹。三時の方向、距離150キロ！」

「サンキュー、ポール。ゆのか、準備できてる？」

「あつたりまえ、ぞりー！行くよ、ポール！にやああああああつ！（↑気合い）」



「アイ」

どっこおおおおおん。ポールのロケットエンジンが噴射した轟音とともに、地上から垂直上昇したゆのかとポールは、あつと言う間に青空の雲の間に消えて行った。どこかメイド服に似た耐熱性の高速飛行用ユニフォームに身を包んだゆのかは、ポールにまたがって宙を駆け、エスパー部隊の誰よりも早く敵に遭遇する先鋒の重役を担っている。

「ふわーっ、気合い入ってるねー、あの娘！ポール、他に敵は？」

「現在周囲200キロ圏内に、ガチャピン以外の目標を認

めません」

司令官であるゾリラのパートナーは、遠く離れた敵を見る視力とその音を聞く聴力を持ったポラリス少尉である。ガチャピンなどの生物兵器（怪獣）はリーダーにからず衛星からも識別困難なため、戦場での策敵はポーラのようなクレヤボヤンス超能力者だけが頼りである。

「ゆのかより、入電！」

「メインスピーカーにつなげ！」

「ポーターツ、ガチャは2匹しかいないよ？ 数え間違いない？」

「そんなことない！ ぜったい3匹いるはずよ！！」

「そーかなー？ ま、とりあえず足止めするね！」

体高30メートルほどの、緑色のおぞましい姿をした2匹のガチャピンから100メートルほどの距離に着陸したポールから、ゆのかは飛び降りた。そして大きく息を吸って、彼女のかわいらしい美声を思い切り怪獣たちにぶつけた。

「はああつ、すううううつ、正座あああああああああああああつ！」

「ぐぎやあああああつ！！」

二匹の怪獣たちはがっくりと膝を落とし、その場に座り込んでしまった。これがゆのかの能力である。様々な超能力を持ったエスパー養成学校の同級生たちさえもことごとく病院送りにした恐るべき能力。ただし、脚を持たないもの、例えばポールには、全く効果は無い。

「オツケー、ぞりー。早いとこ主力部隊を送って。長くはもたないよ。せいぜい一時間程度」

「それまでには陸自の琴子さんの部隊がそちらに着くはずよ。でも、ちよつと待って。ポーラの報告では、もう一匹居たはずじゃない？」

「居ないよー？ 2匹だけ。ポーラだってゆのいことあるんだねー」

「ゆのいってゆーな！ じゃなかった。おかしいわねえ？」

その時だった。すぐそばの沼に隠れていた残り一匹のガチャピンが、そつと水面から顔を出し、至近距離からゆのかに殺人音波を発射した。

「ギーーーーーーク！」（ガチャピンの殺人音波）

「アブナイユノカ！」

「えっ？」（ゆのか）

「えっ？」（ポーラ）

次の瞬間、ゆのかはボールに乗って、雲の上に居た。間一髪のところを、ボールに助けられたのである。

「だまし討ちは卑怯だあああっ！ 覚悟しろ！ 正座あああっ！！」

「ぐええええーっ！！」

沼の中の怪物は、がっくりと膝を落とし、水の中に沈んで行った。水中で呼吸できないガチャピンは、きつと数分ともたないだろう。

「ポーラ、ありがとっ！ ポールを念力で動かしてくれたんだね！」

「ええっ？ あたしそんなことしてな……むぐわあ、あっ？」

ポーラの口をうしろから塞いだのはゾリラだった。

「ゆのか、早く帰っておいで。ちゃんとポーラにお礼言うんだよ！」

「司令……？」

「ポーラ、職務命令。あなたはあの時、なにも聞かなかった。ポールを動かしたのは、あなたの念力。いいわね？」

「は……はい（あたしにサイキネシス能力はないんだけど。。。）」

ゆのかはその後10分足らずで、ゾリラの待つ空自の前線キャンプに帰投した。彼女が足止めしたガチャピン2匹は、ほどなく琴子少将の率いる陸上自衛隊首都圏防衛毒ガス部隊によって討伐された。巡航ミサイルに対する防衛技術が確立し、核兵器がその脅威を失ったこの時代、怪物は日本の周辺諸国がときどき日本国民を恫喝するために大都市や原発近辺に送り込んで来る生物兵器である。憲法が改正され、日本国の正規軍として再編成された現行自衛隊の主要任務は、できるだけ戦車、戦闘機やミサイルと言った「目立つ」手段を使わず、メディアが騒ぎだす前に迅速かつこっそりと怪物を退治することである。

「あーあ、疲れた疲れた。まったく、ぞりーったら、人使い荒いんだから」

宿舎に帰ったゆのかは、例のメイド服スタイルの防護服を放り出して、シャワールームに飛び込んだ。ショートカットの髪に、暖かいお湯が心地良い。スリムで長身のゆのかのシルエットが、湯気で曇ったガラス戸にうつる。汗を落とした体を拭いて落ち着いたゆのかは、裸にバスローブ

をまっただけで、パソコンを立ち上げてツイッターを始めた。

「あ、来てる来てる！ habaraさんからのリブ♡」

habaraとは、ツイッターの鍵アカの中にゆのかだけを入れてくれて、ゆのかだけをフォローしている、謎の男性である。年齢28歳、情報系の大学院を出てシステムエンジニアの仕事をしていると、自称している。ただ実名、職場、居住地は不明で、尋ねても教えてくれない。オフで会うこともかなわない。でも、ゆのかはhabaraが大好きだ。



habaraだけはゆのかのドジを、決してからかわない。電柱にぶち当たったという、彼女のお決まりのツイートに対して、揶揄の言葉を決して浴びせず、ただ彼女にケガは無かったかと気遣う。ゆのいゆのいの大合唱を浴びせる他の連中は全員ブロックしても平気なゆのかはツイッターを続けている唯一の理由が、habaraの存在である。

“ゆのかは自衛官で、戦闘機のパイロットをしてるんだって？！すごいな！！”やはりタダモノではないと思っていました。でも、危険なお仕事なんだね。心配です。目前の敵を打ち負かしたことに油断して、背後から襲われたりしないように気をつけてね”

「habaraさんって、わたしの事を何でもわかってくれる！でも、戦闘機乗りって嘘ついちゃった。電柱に乗ってるなんて、とても言えない、言えない！」

ゆのかはhabaraに、甘えた言葉でリブを返した。友達以上、恋人未満。ネットでしか会えない彼。なりすましの可能性を完全には否定できないけれど、ゆのかの女としての第六感が、habaraの実在を確信させていた。明日までに、彼からのリブが返って来るだろう。一日一ポスト。ゆっくりとした、しかし決して途切れることのない会話。これがゆのかの、秘密の楽しみである。

「ねえ、カノーブス、どう思う？ あたし超能力の使い過ぎで、幻聴を聞くようになったのかな？」

「いや、ポーラさん。それは幻聴ではないと思われませう。ゾリラ司令も聞いたのでしょうか？」

ポーラリスの質問に答えているのは、カノーブス軍医長。彼はエスパー部隊の健康管理を担当している。少尉であるポーラリスよりも軍医少佐であるカノーブスの方が階級ははるかに上だが、目と耳のエスパーであるポーラリスにいろいろと弱みを握られているらしく、言葉遣いは丁寧である。

「だと思う。はっきりとはわからないけど」

「アブナイユノカ！——ですか。状況から見ても、ポールが叫んだと考えるのが妥当でしょう。いや、思ったと言う方が正確でしょうね。ポールのスピーカーはアイとしか言えないはずですから」

「思念波？ でも、ポールはロボットでしょ？ あたし人間の頭の中の話は聞こえるけど、コンピューターの考える事なんてわからないわよ」

「あ、ああ、そうでしたね」

「カノーブス、あなた何か隠してるわね」

「いえいえ、そんなこと。めっそうもない！」



「あたしを舐めないことね。ポールがどうして思念波を出せるのか、教えてちょうだい。教えないと、あなたの女装趣味の事を部隊のみんなに……」

「ああああ。わ、わかりました。教えます。でも、ゾリラ司令には、わたしが喋ったと言わないでくださいよ。ポールは……ポールは、ロボットではありません。彼は、サイボーグです」

「どう違うの？」

「サイボーグは、脳以外の体の部品を機械に代えた、人間です」

「えっ？ じゃあ、あの電柱の中に……？」

「はい、ポールは脳を持っています」

「司令はそれを知っているの？」

「はい。どうして口止めされるのかまでは知りませんが、だいたい、あんな加速度で飛行する体に脳を搭載する事に無理があるのです」

「どういうこと？」

「いかなる物体も、加速度の影響から逃れる事はできません。硬いチタン合金製の脳殻に収められているボールの脳も、例外ではありません。ゆのか中尉を乗せているボールは安全加速度までしか出しませんから、ゆのかさんもボールも脳に損傷を受ける事はありません。しかし、この前ボールがゆのかさんを助けたとき、ゆのかさんに乗せていない彼は瞬間的に、人間の脳の安全限度をはるかに越えて加速しました。ボールの脳は、相当のダメージを受けたはずです。死んだ神経細胞は、再生しません。こんな事を繰り返している、いつかボールは……」

「ボールはそのことを知っているの？」

「おそらく。でも、ボールに安全加速度までしか出すなど命令しても無駄でしょう」

「どうして？」

「ボールは、ゆのか中尉のこととなると、見境が無くなりますから」

航空自衛隊首都圏司令官のゾリラ准将と、陸上自衛隊首都圏防衛部隊司令官の琴子少将は、防衛大学卒業以来ずっと一緒に戦ってきた、気のおけない仲である。ふたりは情報交換と称して、よく「カフェソラーレリナックスカフェ秋葉原店」、通称「リナカフェ」でコーヒーを飲みながら油を売っている。

「ゾリラ、あの電柱に乗ったメイド服娘、何て言ったわけ？」

「ゆのかのこと？ 琴子さん、前に会ったことあるでしょう？」

「そうそう、ゆのか。何であの娘、いま中尉なの？ たしか鉤路奪回戦のときは、ゾリラやあたしと同じ大佐だったじゃん。それもエスパーじゃなくて、主力部隊の。空自って、ひどい人事するんだなあって思った」

「ゆのかが中尉なのは、あの娘が自分で望んだことなのよ。もう、部下が自分のために死ぬのを見たくないって。中尉まで落ちれば、自分自身が危険な目に遭っても部下が身代わりになることはないからって」

「ふうん。でも、部下についてるじゃん？ 電柱みたいなの」

「ボールのこと？ でもあれはロボット」



「ゾリラ、わたしを誰だと思ってる？ それとも、なにかい？ こんどから空自は人間の脳みそを、ロボットののお守り代わりに内部に埋め込むことにしましたってか？」

「琴子さんにはかなわないわ。はい、そうです。ポールはサイボーグです」

「でも、空自の技術力って、すごいよね。あんな加速度に耐えられるほど、脳殻の対ショック技術が進んだんだねー」

「そんな技術……ありません」

ふたりの会話が途切れた。3分くらいも経ったろうか。琴子は小声でゾリラに聞いた。

「いまどき、特攻？ あの脳みそ、そのうちつぶれちゃうぞ？ それとも、頻繁に他の脳と交換するのか？ ダメージが蓄積する前に」

「わかっていきます。脳交換の予定はありません。電柱型サイボーグ計画は、ポール一体で終わりです」

「あの脳みそは、それを知っているのか？」

「はい」

「ゆのかは？」

「知りません。絶対に知るべきではありません。ゆのかは、ポールがロボットだと思い込んでいます。それがゆのかのためです」

「なんで？」

「それは、聞かないで」

ゾリラの目が潤んできたのを見て、琴子はこの話題を続けるのをやめた。

ゆのかとポールのコンビは、この一年でもう20回の出撃をこなし、100体以上のガチャピン、ヒワイタチ、マシャン、ドツコンなどの怪獣退治に貢献した。ゆのかは危険に直面するとポールが、ゆのかの指示を待つことなく、ゆのかを安全な場所まで避難させてくれる。ゆのかは全てポラリスがポールを遠隔操作していると思いついていた。もちろん、ポラリスはなにもしていない。ただ、ポールの

思念波の叫びを聞くだけだった。ポラリスは心配だった。最近、その思念波が弱くなっているようなのだ。何も知らないゆのかは、今日もボールに危ないところを助けられ、前線キャンプに帰投してきた。

「ぞりー、ボールを点検に出してくれる？ 最近、飛行中にふらつくんだ。ジャイロがおかしいんじゃないかと思っ
てさ」

「そう、じゃあ、カノーブスに頼んでおくれ」

「なんでカノーブス？ あいつ、軍医だよ？ ロボットの修理なら、志乃さんのラボ」

「あ、ああ、そうね。志乃さんもうすぐ演奏会でオーボエの練習たいへんそうだけど、頼んどくわ」

「へんなぞりー。わたしのパートナーにロボットあてがったのは、ぞりーのくせに」

「ゆのかがうつったのよ。最近わたしも、ゆのなくなったわ
ー」

「ゆのいってゆーな！ まあ、ロボットのほうが良かったかなど、今では思ってる。愛着は湧いても、愛情までにはならないからね。戦場って、いつ何が起こるかわからないもの。ロボットなら、修理もできるし、交換もできるからね。じゃ、ボールの点検、お願いだよ」

「はいはい」

ゆのかは司令室を出て行ったのを確認して、ゾリラは電話をかけた。

「もしもし、カノーブス。ボールの診察をお願い。至急よ」

「来ます！ ヒグカツバ三匹。二時の方向、距離100キロ！」

「ずいぶん近くまで侵入されたわね。琴子さん、大丈夫だといんだけど」

「ぞりー、わたしが行くか？」

「あんたは、今日はここに居て、前線キャンプの防衛にまわってちょうだい。ボールは今修理中なんだから」

突如千葉県に現れた中国の最新鋭生物兵器ヒグカツバは、火炎を吐いて村や町を焼き尽くしながら、東京に迫っていた。琴子の部隊の主要兵器である毒ガスは、ヒグカツバの敏捷な動きにかわされ、効果がない。

「陸自の琴子司令から入電です。メインスピーカーにつながります」

「ゾリラ、やばい。止められない。前線キャンプを撤去するんだ。あいつら、ちよこまかと動きが速い。毒ガスが追いつかない！」

「ぞりー、あたし行くよ。へり借りるよ！」

「ゆのか、なに言ってるんの！ダメよ！ポールなしで！！」

「でもこのままじゃ、琴子さんの部隊、壊滅するよ。そしてらどうやって首都を守るんだよ！」

「くっ！」

ゾリラはモニターを眺めた。たしかに、今あの怪物達の動きを封じて毒ガス攻撃を可能にできるのは、ゆのかしかない。

「ゆのか……気をつけてね」

「わかってるって！」

ヘリコプターで輸送されたゆのかは怪物の近くに降り立った頃、前線キャンプのゾリラに本部のカノープスから緊急連絡が入った。

「ゾリラ司令！ポールが突然、医務室から発進しました！」

「ええっ？ ポーラ！？」

「はい、聞きました。ポールの叫びを！ポールは、ゆのか中尉の救出に向かっています。でも、この加速度だと……」

そのとき、スピーカーから戦場のゆのかの声が聞こえてきた。

「はああっ、すううううっ、正座あああああああああああああああっ！」

「ぶひやあああああああああっ！！」

二匹の怪物たちはがっくりと膝を落とし、運動能力を喪失した。こうなると怪物達は、琴宮神社秘伝の毒ガスの敵ではない。たつぷりとガスを吸わされたヒグカッパは、ほどなく絶命した。

「オッケー、ぞりー。片付いたよ。カッパ二匹。はあー、危なかった」

「ちよつと待って！二匹って言った？三匹居たはずじ

やない？」

「居ないよー？琴子さん、三匹目ってどこ？」

「ばかっ！あんたのすぐ後ろだよっ！！」

その時だった。ゆのかの背後の高層ビルの中に隠れていた三匹目のヒグカッパが、ビルを押し倒してゆのかを下敷きにしようとした。ずううううううんっ。土煙がもうもうとたち、ゆのかの姿はビルの下に消えていた。

「あちやー、やった。」

琴子の部隊がゆのかを救出しようと走りよったとき、瓦礫の下からゆのかの声がした。

「う、くっ。よ、よくも。よくもやったなあああ。ど、土下座ああああああああああああっ!!」

正座攻撃を上廻るゆのかの土下座攻撃は、ヒグカツバを地面にうつ伏せに叩き付けた。

「ぶしゅううううっ!!」

琴子の毒ガスを浴びるまでもなく、ヒグカツバは絶命していた。

「よっしゃあ。ゆのかを救出しろ!」

「司令、瓦礫の中から、声がします。女性の……泣き声です」

瓦礫を除去した現場で琴子が見たものは、コンクリート

の固まりを支えて半分折れかかっている電柱と、電柱をなでながらすすり泣いている、メイド服姿のゆのかだった。ポールが瓦礫を支えてくれたおかげで、ゆのかはかすり傷を負っただけだった。

「ゆのか、大丈夫か?」

「ポールが。ポールが、死んじゃった。これで二度目。わたしを守って死ぬのが、これで二度目」

「ん、でも、その電柱はロボット。」

ゆのかはうなだれて、かぶりを振った。そして、今にも途切れそうな、か細い声で言った。

「わたし、知ってた。なにもかも、最初から」



「ゆのか……」

「みんな、演技。わたしも、わたしの役目を演じてた。ひとから愛されるって、どうしていいかわからない。ひとを愛するって、もっとわからない。だから、ずっとラブコメごっこを演じていたかった。現実を見るのが、怖かった」

もう動かなくなった電柱を手のひらでやさしくべちべちと叩きながら、ゆのかは呟いた。

「ずるいよ。自分だけマジで恋愛しちゃって。わたしが本気になった時には、もう手の届かないところに行っちゃった」

「ゆのか、電柱から離れるんだ！ ロケット燃料が漏れてる。爆発するぞ！」

「いい。このままで居させて」

「ばかやろう！ そんなことしたら、あとでソリラに殺されちゃうわ！」

ゆのかは琴子の部下によって、瓦礫の中から引きずり出された。そのとき、ボールの折れた断片から、白煙が吹き出て来た。

「やばい、来るぞ。総員退避！」

「いやあああああっ！ ハバラさああああんっ！！」

どどどどおおおんっ！ ボールのロケット燃料による爆発があたり一面の瓦礫を吹き飛ばしたとき、ゆのかを乗せた陸自のヘリコプターは間一髪で離脱していた。

「さよなら、ハバラさん……」

上空を旋回するヘリから、ゆのかは地面に開いた穴を、いつまでも見つめていた。

「ふうん、それで空自は、ゆのかをむりやり准将にしちゃったんだ？」

「ええ。敵の怪獣に対応できるエスパーが、小娘ひとりだけじゃ心もとないって」

あれから一年経った。ソリラと琴子は、新築の統合自衛隊超能力戦士養成学校の廊下を並んで歩いていた。

「それで正座土下座の使い手を養成する学校を創立して、ゆのかを校長に据えたってか？」

「はい。今のところあれを使えるのはゆのかしかいませんから」

「やれやれ。そのうち『せいざー!』とか『どげざー!』とか騒ぐ輩が、陸海空の全ての自衛隊にごろごろ出現するのよ」

「しかし、防衛力強化という観点では、それが最良の策でしょう」

秋葉原のと真ん中に建てられたエスパー養成校の校庭には、桜が咲いている。それを校舎の窓から見下ろしながら、琴子はゾリラに問うた。

「あ、そいえば、電脳硬化症だったわけ？ あの電柱の脳は。どのみち、もうあと数週間も持たなかったって？」

「軍医の報告では、最後の出撃の前に、既に意識はなかったはずだということですよ」

「へえーっ。意識無しで、捨身の救出かー。で、ゆのかは本当のところ、どこまで知ってたんだ？」

「わかりません。あの娘ガンコだから、言わないって決めたら絶対に言いませんから」

「そういう感じはするなあ。でもあの娘、いまだに突然街の中で電柱に抱きつくんだって？ まだふっきれてないのよかなあ」

「まあ、抱きついてるのか、前方不注意なのかは、はっきりしませんけどね」

ゾリラと琴子は、三階の特別実習室に着いた。今日はゆのか校長自らが、新入生に正座攻撃の指導を行っている。

「あ、やってるやってる！」

琴子ののぞいた教室の中では、ゆのかが六人の新入生を前に、息の吸い方を指導していた。

「はああっ、すううううっ、はあああっ。はい、やってみて」

「はああっ、すううううっ、ふうううううっ」

「もうっ、ソラハー少尉！ その、いちいちおならをする癖、なんとかならないの？」

「そんなこと言ったって、ゆのか校長。生理現象は、しかたないですよ」

「誰かさんのドジっ娘がしかたないのと同じ……」

「ほらそこ！ またカツカ中尉？ ぐっぐっぐっ」

「いやあー。これ以上背を低くしないでください！」

窓の外から教室をのぞいていた琴子が吹き出した。

「ぶっ。まるで幼稚園。いじられキャラは変わらないねー」

「でも、ゆのか、幸せそうに見えませんか？」

「あー、そうかもね」

ぼかぼかと、春の陽射しがあたたかい。生徒達はみんな、校長を好んでいる。好きだから、いじりたくなる。ドジだ

けど、一生懸命な、若い女性の校長を。毎日必ず一度はこの学校から聞こえて来る、秋葉原の名物になったあの声が今日も響く。

「ゆのいってゆーな！」

(完)

秋葉原

作詞/作曲 かの一ぶす



ke-i - ta - i no de - n - chi - wo ki ni shi - na - ga - ra
na-ni-mo ki-me-ra - re - na - i wa - ta - shi da ke do



a - ki - ha - ba - ra no e - ki de de - n - sha wo ma - tsu
a - ki - ha - ba - ra mo ma - chi - wa tsu - tsu - n - de kure - ru




hi - to - ri - bo - chi yo - ru - o - so - ku na - re - k - ko da ke do
i - ki - te - i - ru so - no - a - i - da yu - me - wo - mi - sa - se - te



to - ki - ni - wa ya - sa - shi - i - u - de da - ka - re - te mi - ta - i
na - ga - sa - re - ru ku - i - ba - ka - ri no - ko - shi - ta - ku - na - i



yu - no - ka yu - no - ka na - mi - da - wo hu - i - te
se - su - ji - wo no - ba - se



yu - no - ka yu - no - ka wa - ta shi - wa na - ka - na - i
wa - ta shi - wa ma - ke - na - i

著: かのーぶす @nankyokujusei

表紙/挿絵: 色華 @shikika

裏表紙: みことつくす @mktx

編集/発行: 子狐たゆん (そりーじゃ) @zorrilla_

And thanks to ゆのい元ネタ: @yunoka

Yunoi Clips

～another story～

2011年12月30日 初版発行

サークル 電柱 <http://lanleve.jp/>

印刷 キンコーズ 渋谷店 さま



Yunoi Clips

2011 Winter from Denchu